

複文の単文化

加藤 重広 (北海道大学)

1. はじめに

従属節をその修飾構造から統語的に区分すると、①形容詞のように名詞を修飾する連体節 (=関係節, 形容詞節), ②副詞のように述部あるいは述部を含む節を修飾する連用節 (=副詞節), ③より大きい構造のなかで, その全体が名詞として扱われている名詞節, に分けることができる。

- (1) 私は、太郎が教えてくれた書店で、課題図書の中で最も高価な本を買いました。
- (2) 課題図書を売っている書店を太郎が教えてくれた。
- (3) 私は、昨日太郎に三平方の定理を教えてもらったから、今日のテストで満点をとりました。
- (4) 台風が関東地方を直撃した昨日、交通機関は終日乱れっぱなしだった。
- (5) 私は、花子が太郎と結婚したのが悔しくてたまりませんでした。
- (6) 私は、花子が太郎に三平方の定理を教えてもらったと聞きました。
- (7) 花子が太郎に三平方の定理を教えてもらったと の うわさがある。

連体節は多くの場合、単文(述定)と形態上同一であることが多いが、これは動詞と形容詞(→イ形容詞のみ指す。以下同じ)の終止形と連体形が合流したことによる。ただし、形容動詞(=ナ形容詞)と名詞述語などでは単文と連体節で形態が異なる。連体節は、修飾を受ける名詞(=主名詞)の直前に置かれる。ここでは、関係節が形容詞節、関係節と主名詞を合わせた全体(加藤2003, 2010でいう「関係節構造」)が名詞節にあたりと見る。

副詞節は、主に接続助詞(=副詞的従属節化辞; *adverbial subordinator*¹)を末尾に伴う。副詞節は、節末に副詞節の標識があるが、形容詞節は連体形が分化している場合を除けば、形容詞節の標識を欠く。英語の関係代名詞は、形容詞節(=関係節)の標識で、関係節内における格標示の兼務するものと見なすことができるが、日本語にはこれがない²ため格標示がなく、格標示がないことが関係節の成立を構造的にではなく、意味的に決めていると考えられる(加藤 2003)。節引用の標識であるトも分類上は副詞節の標識に含めうる。いわゆる準体助詞のノは節の名詞化の機能を持つと見て、名詞節の標識と考えてもよいが、

¹ Norde 2009 は、脱文法化を *degrammation / deinflectionalization / debonding* の3タイプに分け、日本語の接続助詞「が」を *adverbial subordinator* として、それが *free linker* (自立語の接続詞) に転じるケースを *debonding* の例として挙げている。

² 関係詞は Heath 2010 のいう境界化辞(*boundary-making morpheme*)に相当する。境界化辞は、通例境界末端部に現れ、境界を示せばよく、格標示を兼務する必要はない。英語の場合も前置詞+関係代名詞などでは格標示は前置詞に譲っており、関係詞は全体として主名詞の形態格の種別を表しているに過ぎない。

(24) 今のところ {*乾いた／乾いている} 空気

(25) かつては {*湿った／湿っていた} 空気

この共起テストは一つの参考にはなるが、絶対的なものではない。加藤2012では、常体表現にテイルが後接して一時性を表す際の条件を論じているが、(27)のように不可逆性が強い変化ではテイルが使用しにくい。「角が折れた」ことが一時的と解釈できるかどうかは、世界知識に影響を受け、それで受容度が変わるので語用論的な特性と見ることになる。

(26) このエアコンは調子が悪く、加湿を選択しても、出てくる空気の湿り気が一定ではなく、湿り気が強くなったり弱くなったりする。今のところ乾いている空気が出ている

(27) ?今のところ角が折れているトナカイ

2.3 時制と節性の対応

テンスを持つ連体修飾表現が節をなし、テンスを持たなければ節ではなく句だとすれば、少なくとも形容詞節 (=関係節) か形容句 (連体修飾句) かは、形式ではなく意味的に決まることになる。この区分の条件として、日本語において節は主要部となる述部だけで成立するという規定が必要になる。

(28) 太郎がいれた コーヒー はおいしい。 ←下線部は句

(29) 太郎がいれた コーヒー を僕は飲まなかった。 ←下線部は節

(30) エアコンから乾いた 風 が出ている。 ←下線部は句

(31) エアコンから乾いている 風 が出ている。 ←下線部は節

タとテイルが意味的に中和しているように見えても、厳密には中和していないのであり、解釈が近接するために対立が後景化していると考える。解釈が近接したときにタ形のほうが受容度が高く、テイル形の受容度がやや落ちる⁶が、これは、ほぼ同じ機能を実現するときには単純な形式 (無標形) が望ましく、有標形を使うには相応の動機や効果が必要 (Horn 1984の語用論的分業原則, Grice1989の修正オッカムの剃刀原理(MORP)など) という、言語の経済原理で説明できるだろう。

3. 非節化と複文の単文化

加藤 2009, 2011では、文法化に伴う単文化について論じている。(32)(33)は、「事実」「こと」を主名詞とする関係節構造⁷と見ることができるが、(33)とほぼ同じ形式の(34)は、「ことがある」を助動詞と見て、本来(33)の複文構造から、主節が非節化(*de Clausalization*)⁸を生

⁶ 大島 2010:5 では、(20)のテイル形などについて判断は微妙だとしている。(20)の「鬱蒼としている」は、「鬱蒼とした」のほうがより自然で無標であり、それに比較すると相対的に不自然さがあるということであり、単独で受容度が非常に低いという意味ではない。

⁷ ここでは、加藤.2010 に倣って、連体修飾節 (=関係節) + 主名詞の全体を「関係節構造」と呼ぶ。

⁸ Lehmann.1988. は従属節が節としての性質を失うことを脱文化(*desententialization*)と呼ぶ。ただし、これ

じ、複文から単文へと転じて、単文構造の(34)が得られたと考えるのである。(32)が「事実が」が主節の主語であり、「ある」が主節の述語（主動詞）であって、「事実がある」が主節であって、下線部が連体修飾をおこなう従属節であるとすれば、(34)も形式的には同じように複文とみなせそうである。しかし、実態は(34)は「太郎」の属性叙述になっている。もちろん主題化も関わっているが、これについて波線部が主節でなくなる変化が生じて、全体が単文になったと考える。この変化を「非節化」と呼ぶことにしたい。

(32) 太郎が札幌に来た 事実がある。

(33) 太郎が札幌に来た ことがある。

(34) 太郎は、札幌に来たことがある。

非節化は、以下のようにまとめることができる。

(35) 主節全体を含むシンタグマが文法的な機能確立させたとき、そのシンタグマ全体は助動詞相当になり（＝文法化し）、それまでの主節が節でなくなる構造解釈変化を非節化(*declausalization*)と呼ぶ。非節化が生じると、それまでの従属節が主節に昇格することで、節の数が減ずる節減少(*clause reduction*)が生じる。従属節が1つだけの複文であれば、全体が単文となる。

日本語では、形式名詞コト・モノ・ワケ、ノが非節化に顕著に関わる⁹。コトダ・モノダ・ワケダ・ノダ（以下、コトダ類）は、形式名詞にコピュラが後続し、内部に境界を持たない点で文法化が進みやすい条件が整っている。加藤2007では、日本語の膠着的述部について、2種類の境界¹⁰を区別している。

(36) ハ・モ・スラ・サエなどの副助詞が挿入（結果的な置換も含む）できる位置に弱い切れ目があるとし、これを弱境界(*weak boundary*)と呼ぶ。

(37) 過去テンスなどを表すタが出現できる位置に強い切れ目があるとし、これを強境界(*strong boundary*)と呼ぶ。

これに従えば、コトダ類は弱境界も強境界も内部に含まないが、テイルやコトガアルは内部の弱境界を含んでいる。テイルは1つのアスペクト辞と扱われることがあるが、内部に弱境界を含むことが、ある意味で文法化の完成を妨げているとも言える¹¹。形式名詞を含むコトダ類やコトガアルは、直前に強境界を持つ。助動詞類は、おおむねテンス分化があ

は以下のように節が名詞（副詞も含む）の性質を持つ構文転換のことで、文法化を直接議論しているわけではない。ただし、節としての特性が減ずることは、個別事象を指示せず、一般事象を指示する一般化への変化であるとする。よって、類似の特質もあるものの、ここで言う非節化とは厳密には異なる。

(i) Sandra decided that she would not go to the meeting. (ii) Sandra decided not to go to the meeting. (iii) We are waiting for John to arrive. (iv) We are waiting for John's arriving. (v) We are waiting for John's arrival. (vi) We are going to attend the meeting.

⁹ ここでは、益岡 2007 の説明のモダリティ「のだ・ことだ・ものだ・わけだ」に含まれるものを節減少にかかわる形式名詞として一括しておく。

¹⁰ この境界は形態統語的(*morphosyntactic*)な境界である。

¹¹ たとえば「食べている」は「食べてもいる」のようにすることができ、他要素の介在を同一助動詞の内部に許容することは、全体の統合性を妨げていることになる。口語俗調では、「てる」となることがあるが、この形態では弱境界が消失し、ある意味で統合性が高いことになる。

るので、いずれも直後に強境界を持つ（ダロウのみ直後に強境界を持たない¹²⁾）。

(38) 太郎が札幌に来たことはある。

(39) 太郎がバナナを食べている→ 太郎はバナナを食べてもいる

(40) 太郎が札幌に来ることもある。

日本語では、ボイスがアスペクトやテンスに先行するのが一般的であるが、境界の前後では原則通りにならないことがあり、弱境界・強境界は形態論のレベルで膠着的な述部複合の出現順序に関わっていると考えられる。

(41) バナナを食べ-させ-られ-て-い-た-よ-う-です。

(42) バナナを食べ-させ-て-い-られ-た-よ-う-のが印象を悪く-し-まし-た-よ-う-で
す。

3.1 非節化と日本語の類型特性

日本語は主要部右方型の言語で、一般に述部複合には階層があるとするのが一般的である。（形態論的制約で指定階層通りにならない場合は、ここでは議論しない。）

(43) [[太郎が花子にバナナを食べさせられた]_{命題} らしい]_{認識モダ} よ]_{伝達モダ}

形式名詞が関わる助動詞的な要素も、形式名詞が構造上の主要部となって、右方に付加される。このとき、構造的には、命題部がより従属節として深くなっていく。従属節の埋め込みが深くなり、付加要素が増えるのは他言語でも見られる。また、付加されるものが構造上主節であっても、意味的な重心を持たないケースがあることも共通している。

(44) 来年はヤクルトが優勝する。

(45) ヤクルトが優勝する可能性がある。

(46) [ヤクルトが優勝する可能性がある]という話だ。

(47) [[ヤクルトが優勝する可能性がある]という話だ] ってよ。

(48) I hear [that there is a rumor [that most students think [that Bill is going to resign his position]]].

(49) It seems that there's no time at all.

(50) Seems like there's no time at all.

(51) There's no time at all, it seems.

(52) Seemingly, there's no time at all.

これは、意味的重心が前方にあり、後方に構造上の主節を付加することで、意味重心と構造重心がずれてしまうことによると考えられる。意味と構造（形態）のずれは、前者の優越によって調整され、それが文法化・節減少・非節化の強い動機になる。意味が形態に対して優越して、構造解釈を変える力として作用することを、加藤2011では便宜的に意味

¹²⁾ 「だろう」はテンス分化を起こさず本論で定義する強境界はないが、構造上の切れ目がないということではない。

優越原理(semantics-over-morphology principle)と呼んでいる。

3.2 構造と語用論的特性

Ariel 2008では、語用論的な選好(preference)が文法化の強い動機になると考える(→ Today's pragmatics is tomorrow's grammar.)。線条性の観点から構造を考えると、以下の諸点を念頭に考察する必要がある。なお、「N₁だ」という、名詞述語のみの構造に相当する表現の成立を許容する条件も含んでいる¹³。

- (53) 日本語では、すべて言い終わらないと主節が確定しない。しかも、主節(主要部)があとから追加されるので、構造がオープンである時間が長い。
- (54) 主要部左方型言語では、早い時期に構造が確定してクローズドである時間が長い。文末付加は、構造解釈を変えない。
- (55) 日本語では、主述一致義務や主語明示義務がなく、構造保持の動機が弱い。
- (56) 従属節述語と主節述語の近接しやすく、述部複合に取り込まれやすい状況がある。
- (57) 線条的語用論(心理語用論)の観点から見ると、日本語の構造は、注意を要する時間が長く、聞き手の負担が大きい。
- (58) 負担を軽減するには、付加される主節が発話全体の意味を大きく変更しないことが必要になる。

たとえば、(59)では、下線部が意味の重心であり、それ以降は、情報上の相対的な重要度が低い。このことは、構造的に主節をなすシンタグマを文法化していくことで、運用上の負担を軽減することにつながっていると説明できる。問題は、主節をなすシンタグマを文法化して非節化を生じると、境界が内部に残ることであり、これは文法化の完成度を阻む働きをしようすることである。

- (59) 太郎が次の町内会長になるかもしれないらしいって話があるみたいだつて聞いたんだけどね。
- (60) 君は論文を書かなければならない。
- (61) [君が論文をかかなければ] 従属節 + [ならない] 主節
- (62) 君は[論文を書か] 述部主要部 + [なければならぬ] 助動詞(補部)

「なければならぬ」「てもいい」などは、弱境界に相当する部分に副助詞類は挿入できないので厳密な弱境界ではないが、間投助詞は挿入可能で弱境界に準ずるものがあると考えられる。この種の機能的統合は、形式名詞の前など強境界のあるところで生じるのが普通だが、(61)(62)のように従属節と主節の境界を含んで、従属節の一部を含んで統合されることもあり、興味深い。

¹³ 本来であれば、「N₁はN₂だ」という同定文であることが構造上は想定されるが、構造上は「N₁は」が置かれないことが許容され、結果的にコトダ類の文法化を促進する条件が整っていたと見ることができる。

4. まとめ

本発表では、以下の二点を主張した。

- (63) 「濡れた傘」と「濡れている傘」など、意味中和に見える例は、厳密には中和ではなく、意味的に近似しているに過ぎない。前者は主体変化の自動詞がテンスなしと解釈され、形容詞相当なり、節性が低く、句相当である。
- (64) 経験を表す「ことがある」は本来の主節部が助動詞化したと見なせる。主節が節性を喪失（＝非節化）したことで、従属節が主節化し、全体の節の数が減じ、複文が単文化してしまう現象（＝非節化による単文化）が伴って生じる。これには、意味優位原理や日本語の右方主要部性などが関わる。

参考文献

- Abe, Yasuaki. 1993. "Dethematized subjects and property ascription in Japanese", *the Proceedings of the 1992 Asian Conference on Language, Information, Computations, Seoul*
- Ariel, Mira. 2008. *Pragmatics and Grammar*, Oxford; OUP
- Grice, Paul H. 1989. *Studies in the way of words*, Cambridge (Mass.): Harvard University Press
- Heath, Jeffrey. 2010. "Typology of clausal boundary making devices", *Linguistic Typology* 12, 127-151
- Horn, Laurence R. 1984 "Toward a New Taxonomy for Pragmatic Inference: Q-based and R-based Implicature," in Schiffrin, Deborah (ed.) *Meaning, Form, and Use in Context: Linguistic Application*, Washington D.C. Georgetown University Press, 11-48
- 加藤重広. 2003. 『日本語修飾構造の語用論的研究』 東京：ひつじ書房
- 加藤重広. 2007. 「日本語の述部構造と境界性」『北海道大学文学研究科紀要』122, 97-155
- 加藤重広. 2009. 「日本語の述部複合構造の境界性と非節化」 沈力・趙華敏（編）『漢日理論言語学研究（中日理論言語学論集）』31-37, 北京：学苑出版社
- 加藤重広. 2010. 「日本語の連体修飾表現の類型と特性」 上野善道監修『日本語研究の12章』151-164, 東京：明治書院
- 加藤重広. 2011. 「日本語における文法化と節減少」『アジア・アフリカの言語と言語学』5, 33-57 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- 加藤重広. 2012予定. 「属性の事象化と一時性」 影山太郎（編）『属性叙述の世界』 東京：くろしお出版
- Lehmann, Christian. 1988. "Towards a typology of clause linkage", in Haiman, J. and Thompson, S. A.(eds) *Clause combining in grammar and discourse*, Amsterdam: John Benjamins, 181-225
- 益岡隆志. 2007. 『日本語モダリティ探求』 東京：くろしお出版
- Norde, Muriel. 2009. *Degrammaticalization*, Oxford; OUP
- 大島資生. 2009. 『日本語連体修飾構造の研究』 東京：ひつじ書房